かささぎ 通信 第29号

2014年11月14日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます　　森三郎刈谷市民の会　「森三郎の作品を読む会」

二〇一四年十月の「森三郎の作品を読む会」では、
『赤い鳥』昭和8年4月号初出の二作品を読みました。
「馬方八五郎」（『森三郎童話選集　かささぎ物語』所収）
「けんかの後」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）

「馬方八五郎」には、「熊村」「椎の木山」と、刈谷にゆかりの地名が登場します。しかし、「八五郎は毎日馬をひいて出かけて、木曾へまはる旅人を乗せ、日ぐれになると、とぼとぼ村へかへつて来るのがきまりでした。」という説明から考えると、地理的には刈谷の話と考えるのは無理だろうと、会員の水野さんの考察がありました。

この話は、八五郎が狸に化かされる話です。一回、二回と狸になぶられ、くやしくてくやしくてたまらず、三回目は、こんどこそはと、狸に化かされたふりをして、狸を青松葉でいぶり、仕返しをしようとします。でも結局、狸に化かされるのですが、狸がお礼にくれた小判のお陰で、「ふくふくと」くらすようになります。どちらも決定的に相手を痛めつけないで、なんとも、のほほんとした、のどかな話で、これは作者の森三郎さんの人柄がでているのでしょうか。

「けんかの後」は、四年生の研吉が仲良しの昌二さんと仲たがいをした後の行動と心の揺れを描いています。けんかの後、すぐにさびしい気持ちになりあやまろうと思うのに、そのきっかけがつかめぬまま、お互いに気持ちをこじらせていきます。話は、昌二さんの自分に対する以前と変わらぬ想いを感じ取った研吉が、自分の方から謝ろうと思い「もうこれから、どんなことがあっても、昌二さんをおこらすまい。」と決心する所で終わっています。これまでの「うんすんガルタ」「笛」（以上昭和8年2月号）「雪」（同4月号）も、自分のわがままが成就した後で、そのために相手を悲しませていることに主人公が気づくところで終わっていました。

通信その後　二題

①「かささぎ通信第27号」で『赤い鳥』昭和八年三月号初出の「だゝつ子」について報告しました。その童話の中に、主人公の正男が、尋常三年の夏に、十六色のクレイヨンをお土産にもらう話が出ていました。その喜びが、こんな風に書かれています。

「まだクレイヨンがはやり出したばかりのころで正男たちの級でも　ほんのわづかの子しか使つてゐませんでした。正男も、わづか八色の、カチ〳〵の色エンピツしかもつてゐませんでした。そこへ、あの生き生きした色の出る、クレイヨンをもらつたのですから、それこそ、うれしくてたまりません。」

先日、かつおきんや氏の『時代の証人　新美南吉』（二〇一三・一〇、風媒社）を読んでいると、「最後の胡弓弾き」で、木之助が末っ子の由太のために十二色の王様クレヨンを買う場面のことが、書かれていました。十二色の王様クレヨンは由太がいつもほしいと言っていたものです。まして、十六色のクレイヨンをもらった正男の喜びの大きさがうかがい知れます。この話題については、別の機会にまた触れたいと思います。

②「森三郎の作品を読む会通信　第12号」で「竹馬與市」を取り上げました。竹馬與市の名前は、森三郎さんが創作した名前だと思っていました。ところが『赤い鳥』の「地方童謡」を見ているうちに、大正九年一月号の「地方童謡十　北原白秋選」の中に、神奈川地方――金井昌一報として「ねん〳〵ねんごろ與市、竹馬與市、竹を揃へて船に積む（以下略）」とあるのを見つけました。他にも、西川林之助の詩集（大正十三年）、岐阜県の子守唄などの中にも「竹馬與市」の名前を発見し、森三郎さんの創作の動機などを想像しているところです。

○ 次回予定　12月12日（金）午後1時～3時
『赤い鳥』昭和8年6月号初出作品
「菊の花」・「あのころ」（『森三郎童話選集　夜長物語』所収）